

站

一語 義

站なる語は今日驛の意を有する支那語として普通に用ひらるる所なれども、此の如きは此語本來の意義に非ず。今も用ふる「立つ」「止まる」等の意は即ち其の原義にして、『廣韻』・『集韻』・『篇海』等によれば、久立・坐立不動貌・正立等の義なりと説きて、未だ驛の意あるを説かず、然らば何が故に此の語が原義と異りたる驛の意に用ひらるるに至りしや。『元史』兵志に站赤の篇あり、記して曰く「元制站赤者驛傳之譯名也」と、蓋しこれ元代に於る站赤なる制度の支那古來の驛傳の制に外ならざるを説けるものにして、站なる語が驛の意を有するに至りしは即ち元代を以て初めとすべきを知るべし。而して站赤なる語は此の文意によりて曉り得らるるが如く、支那の驛傳なる語を元朝即ち蒙古人の朝の譯して用ひたる言葉を、更に漢字によりて音譯したるものに外ならず。換言すれば站赤とは畢竟蒙古語にして決して支那語に非ざるなり。『龍沙紀略』(卷一)ト魁站的の註に「土人譯驛爲站」といふに考ふるも、此の語が支那語に非ざるを知るべし。然らば站赤または站なる文字によりて寫せる原語は如何、元代遠く蒙古の朝に仕へし伊太利の人マルコ・ポーロ (Marco Polo) の『旅行記』に「皇帝の使者は王城より出でて何れの道によるも、二十五哩程の處に「ヤムブ」(Yamb) とて驛馬館とも稱すべき驛舎の設けあるを見るべし」(ユ